議事概要

令和４年度　新潟市放課後子どもプラン推進委員会

日　時：　令和５年１月２４日（火）　午後３時００分～４時３０分
場　所：　新潟市芸術創造村・国際青少年センター　４階　多目的スペース２
出席者：　新潟市放課後子どもプラン推進委員
　大谷委員、川口委員、佐藤委員、長谷川委員、山田委員、脇野委員
事務局
　地域教育推進課長ほか７名
傍聴者：　なし

１　開会

２　地域教育推進課長あいさつ

３　委員自己紹介

４　委員長、副委員長の選定

５　議事
（１）令和３年度事業実施状況について
（２）令和４年度事業実施状況及び今後の取組について
（大谷委員）　子どもふれあいスクールの参加率はどれくらいか。
（事務局）　令和４年 12 月末現在で 11%。11%前後がここ数年続いている。多い時は、平成 15 年が 18%という状況。
（大谷委員）　子どもふれあいスクールと放課後児童クラブの重複利用率はどのくらいと想定されるか。
（事務局）　数字までは分からないが、低学年の子どもたちは、大体ふれあいスクールに行ってからそのまま放課後児童クラブに行く。そのため低学年の子どもたちほど利用率はほぼ 100%に近いような状況。
（佐藤委員）　モデル校の取組が、子どもふれあいスクールのスタッフや放課後児童クラブの支援員に伝わって、子どもふれあいスクールと放課後児童クラブが連携することで、互いに win-win の関係になるということが見えてくると良い。
（山田委員）　当校では今年度は開催できていないが、放課後児童クラブの児童は保護者の許可を事前に取って、全員子どもふれあいスクールに参加している。土曜日は１日放課後児童クラブにいるので、子どもふれあいスクールがあると、午前中はそこで体を動かすなど、いろいろなことができる。

放課後児童クラブの支援員が１人留守番を残して、子どもふれあいスクールに全員参加しており、子どもふれあいスクールでの放課後児童クラブの受付は、放課後児童クラブの支援員でやるようにしている。けがをした時の連絡は、子どもふれあいスクールでのけがは、子どもふれあいスクールの運営主任が対応している。

（長谷川委員）当校では、場所が違う放課後児童クラブが３つあり、そこから支援員に１人ずつ子どもふれあいスクールへ来ていて、子どもたちがそこで受付をして、帰るときも支援員と一緒にそれぞれの放課後児童クラブに行くようにしている。

子どもふれあいスクールでけがをした場合も、放課後児童クラブのスタッフから保護者に連絡している。

（川口委員）　当校では、月曜日は１・３・５年、水曜日は２・４・６年、土曜日は誰でも参加できると決めて、週３回やっている。人数の少ない学校なので、放課後児童クラブに行く時は保護者に事前に確認をし、放課後児童クラブにも連絡があり、居場所がわからないということがないようになっている。子どもふれあいスクールで遊んだら放課後児童クラブに行く。

放課後児童クラブも場所がほしいし、どのように子どもたちを過ごさせようかというところで連携が進みやすい。

（大谷委員）　放課後児童クラブの運営をやっているが、子どもふれあいスクールが長期休暇中にやっていると、メリハリになって良い。特に今は新型コロナウイルス感染症の影響で、地域の行事に参加する機会も減っているので、誘いがあればありがたい。

（山田委員）　長期休暇中は午前中体育館で遊んで、昼寝の時間を入れている。小学生のときに子どもふれあいスクールを利用していた、今の専門学校の学生がボランティアで来ていて、昼寝の時間が終わると子どもたちにダンスのステップを教えたり、自分のダンスを披露したりしている。高校生もボランティアで来ている。

（事務局）　思った以上に放課後児童クラブと子どもふれあいスクールで連携していることがわかった。調査をして、良い事例を発信していく必要がある。放課後児童クラブの支援員の立場からすると、子どもふれあいスクールの参加をどう考えているか。

（山田委員）　受付も放課後児童クラブの支援員がしたほうがスムーズ。スタッフの１人として一緒に遊んだり、バトミントンや工作、折り紙等を子どもたちに教えたりして、自然にやっている。

（長谷川委員）今、ＰＴＡがあり方を問われていて、加入問題もでてきている。ＰＴＡのボランティア化ということもある。子どもふれあいスクールのボランティアもＰＴＡが担っている部分が大きくあり、ＰＴＡのボランティア化になったときにうまく移行ができるのか。役員制を廃止したときに、どこまでできるか考えている。放課後児童クラブの運営も、高校生や大学生、専門学生といった、少し若手のボランティアの参加をシステム化

していくことを考えていかなければいけない。

（山田委員）　子どもふれあいスクールでも、ＰＴＡの協力があったが、コロナ禍でＰＴＡの活動自体が休止しており、実行委員、学年の役員は選出をしておらず、会長、副会長、企画委員しかいない。広報に力を入れて保護者に呼びかけることを、学校とも相談してやっている。子どもふれあいスクールのスタッフが少ないところでは、放課後児童クラブの支援員の協力はとても力強い。

（川口委員）　子どもふれあいスクールが 20 年続いているが、初代の頃の方々が今でもスタッフをしている。60 代、70 代の方々が週３回運営していて、イベントの時はＰＴＡの方々が関わる形。学校ボランティアに地域の方が来た時に誘って、スタッフをつないでいくというのが現状。ＰＴＡも忙しいので、土曜日に低学年の保護者が送り迎えをしながら下の子を連れて来たときに声がけをして、スタッフをつなげている。本当は大学生などが来ると良いが、交通の便が悪くて難しい。運動部でない中学生が土曜日の部活がないときに来てボランティアをしている。卒業されたＰＴＡの役員を誘って、少しずつ世代をつくっている。

（山田委員）　子どもふれあいスクールのスタッフは 70 代から 80 代の方も始めた年からやっている。１年生が初めて参加するときに、授業の時間を使って練習をしているが、保護者にも参加を呼び掛けて、勧誘している。

（佐藤委員）　孤独の子育てにならないように、子どもふれあいスクールやＰＴＡでつながるということはとても大事。声がけで参加するということは一つの入口で、人が人をつなげていく、Face to Face で誘い合うということが大切。学生の力は偉大で、学生ボランティアは子どもたちに年齢が近いので、走り方などの運動を教えると、子どもたちの目が輝いていた。

ボランティアをしたことが彼らの履歴になることも大事で、登録制など誰かがコーディネートして、マッチングの手立てがあると、多くの学生がいろいろな学校に行くチャンスにもなる。大学は限られた区にしかないので、マッチングをする場所があると良い。

（事務局）　個人で子どもふれあいスクールのボランティアをやりたいという学生もいれば、大学の授業の中でボランティアとして紹介された学生もいれば、部活動や教育活動の延長でボランティア活動を行うなど、いろいろなパターンがある。コロナ禍で大学がリモートになってから、学生のほうに欲求があって、かなり問い合わせがあった。

大学や専門学校などとつながりを持っていて、いつでも紹介できるなど、ニーズに応えられる状況をつくる必要性がある。来年度の年度初めに大学へ説明に行って、学生に紹介できると良い。

（脇野委員）　ＰＴＡの話に関しては、自然にうまくいっている例があると思うので、紹介できないか。ある学校はうまくいっていても、別の学校は違うということもあるので、すぐにノウハウは使えないかもしれない。学校にはいろいろな風土があるので、簡単に真似はできないが、良い事例を出し

てほしい。

（事務局）　ＰＴＡ会長、副会長が子どもふれあいスクールは大事だと感じて、これを何とかしようという所がうまくいっている。ＰＴＡ会長や副会長に子どもふれあいスクールの良さを伝えられれば、何か変わってくると考えている。

（脇野委員）　学生を含めたいろいろな人材について、学習支援ボランティアとして授業に関することについて学生を派遣しているが、放課後は部活が多くてボランティア活動に参加できない学生もいる。例えば学習ボランティアの学生に放課後も紹介するなど、人と人のネットワークをどんどん広げていけばつながると思う。

また、コーディネーターが全校にいるので、協力を得るということも考えられる。コーディネーターがイベントのようなことをやり、参加者からボランティアを募集する事例が出てくると良い。

（川口委員）　学生と関わって教育活動をつくることは学校の活力になる。放課後だけでも来る人がいたらウェルカムだが、そのような情報が学校にもほしいし、学生も学校に来ることが自分にとってのプラスになると考えてほしい。コーディネートや学校への情報提供によって、学習支援ボランティア以外にも広がると良いと思う。教師が持っていない魅力を学生は持っていて、子どもたちが教師以外のいろんな方と関わって、いろんなものを見たり、聞いたりということは、今とても大事なことなので、そのシステムを少しずつ考えてほしい。

（長谷川委員）教育実習に来た学生が、30 分ぐらい子どもふれあいスクールに来て、一緒に遊んだことで、子どもたちの反応がすごくよくかったので、学生にどんどん来てほしい。地域の祭りで昨年、一昨年と高校生と大学生のボランティアを依頼した際、最終的には学校を通じてではなく個々での参加となったこともあり、マッチングがうまくできると良いと感じている。

（山田委員）　大学や専門学校が近くにないが、地元にいる大学生が直接学校に電話をして参加したということはある。地元にいる学生からもたくさん来てほしい。

（脇野委員）　先輩が後輩に紹介することもあるので、最初は時間がかかるかもしれないが、地道にやっていくだけで変わってくる。今、コミュニティ・スクールをやっているので、校長先生たちにも伝えられると変わるのかもしれない。教育課程外だが、放課後の子どもの生活が充実すれば、それは心の安定につながって、授業もよくなるし、全てよくなるので、少しでもそのようにできる学校があると良い。

（事務局）　子どもふれあいスクールもコミュニティ・スクールの中で役割を進めながら子どもを見守っている大事な要素の一つなので、次年度以降いろいろな所に、機会を捉えて働きかけていきたい。

（大谷委員）　子どもふれあいスクールは、地域の社会資源や保護者と連携すること

で、学校が終わった後の子どもの安全な生活の場を確保する一助になると思う。福祉の業界にいると、リスクの回避や起きたときの対処という所に目が行きがちだが、どうやったら子どもたちが楽しく過ごせるかと考えたときに、地域の方や知らない大人とのかかわりがすごく重要だと感じた。

（３）その他

６　閉会

【配布資料】
・資料１　子どもふれあいスクール事業
・資料２　放課後児童クラブの現状と課題
・資料３　「新・放課後子ども総合プラン」について（通知）
・資料４　子ども・子育て支援事業計画に係るその他の計画